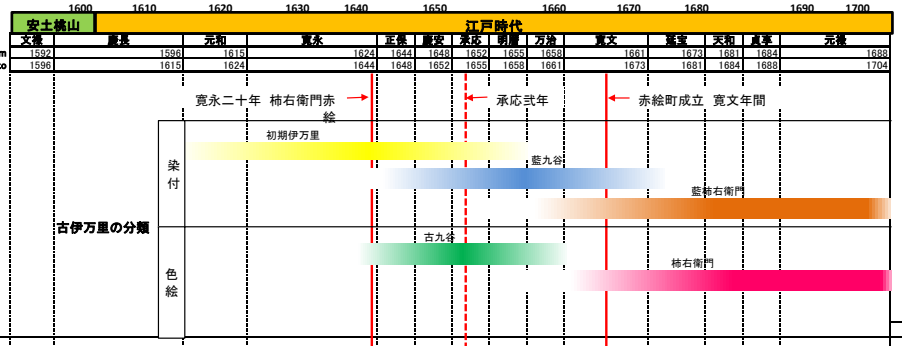
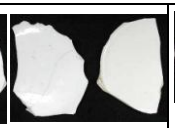
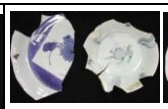
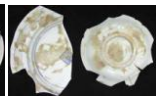
江戸初期　色絵素地を生産した窯



場所			古窯名		素地	製品（染付、色絵）
有田	内山	岩谷川内	猿川	長吉谷窯跡の北東に位置している。寛永14年（1637）以前に開窯していたと推定され、内山では最も早い窯の一つである。色絵素地大皿もいくらか出土しており、染付の入るものと入らないものの両方が出土している。鍋島藩窯「岩谷川内御道具山」跡の説もある。	1620年代～20世紀 染付け　初期色絵(初期鍋島) 鍋島藩窯が南川原に移った1650年代後半から1680年代前半頃までは、VOC(オランダ東インド会社)向けの製品を作っていた。	 器形からみて、上手素地であり、松ケ谷手小皿の素地ではないかと推測される。 この素焼き素地からみて、1650年代に猿川窯などで、上手作品の1部は素焼き焼成されていた可能性が伺われる。	 流水白ぬき三筥文変形小皿(長径16.7cm) 呉須染めに流水と三羽の筥を白ぬきにして美しく表現している。 非常に上手作ぶりであり、猿川窯作の可能性が高いと思われる。 伊万里市歴史民俗資料館所蔵 初期色絵（または初期鍋島焼） 色絵椿文皿（いろえつばきもんざら） 高さ2.2～2.7cm　口径12.2～15.6cm 底径6.4～8.8cm　1640～1650年代 糸切り細工（ざいく）・型打ち成形の変形皿。俗に「松ヶ谷手（まつがたにで）」と呼ばれたもの。口唇部（こうしんぶ）に口錆（くちさび）をほどこし、見込み（器の内側）に伊万里焼（古伊万里）の初期色絵に特徴的な、濃い黄色・濃い緑・暗い赤色の三色をつかって椿を描いている。なかでも濃い緑を効果的に用いて、代表的な照葉樹（しょうようじゅ）である椿の葉の表現に成功している。また、暗い赤線で縁取られた白椿の表現が印象的。 この作品のように、葉の配置や花の向きを変えることによって、画面に奥行きをもたせる手法は、鍋島様式の描法（びょうほう）に通じるものがある。裏には文様はなく、一般的な伊万里焼（古伊万里）にくらべて高い貼り付け（はりつけ）高台（こうだい）がある。 近年の鍋島焼の研究では、承応（じょうおう）元年（1652）から有田町岩谷川内の御道具（おどうぐやま）、猿川窯跡で献上品の製作が始まったとされており、その製品の特徴として、 ①高温で素焼き（すやき）されている。 ②傷や歪（ゆが）みのない完璧（かんぺき）なもの。 ③裏面（うらめん）に銘款（めいかん）などのよぶんな装飾を入れない。 ④ハリ支(ささ)えなし。 ⑤高台（こうだい）畳付（たたみつけ）を三面削り出して、砂が熔着（ようちゃく）するのを防ぐ。 ⑥絵付けが、黒線輪郭（りんかく）に濃い寒色系の色。赤線輪郭に明るい赤・黄・緑の三色。 染付（そめつけ）線輪郭など。 ⑦口径（こうけい）15cm程度の皿と箇形の猪口（ちょこ）が多い。 この作品は、⑤以外は、おおむね要件をそなえており、猿川窯跡で製作された献上品、すなわち初期鍋島焼の可能性がある。幕末頃にガラス接（つ）ぎによる修理がほどこされており、大切に伝世されてきたことがうかがわれる。
		年木山	楠木谷	有田町の最も東に位置する窯。この窯場では東西に並行し、それぞれ南から北へと登る2つの登り窯跡が発見されており、相対的に開窯時期の古い西側の窯体が1号窯、東側の窯体が1号窯と命名されている。 1640年代～50年代頃の最も上質な製品を生産した窯場の一つ。初代酒井田柿右衛門が赤絵や金銀焼付けを創始したと記す窯場の可能性が最も高い。主として中・小皿を中心に生産。型打ち成形の製品も多い。良質な製品と雑な製品の差が比較的明瞭。「承応弐歳」高台銘の製品が数点出土。	染付け　古九谷、藍九谷	 （外面）  （内面） 白磁小皿 （楠木谷窯跡・1650年代後半／柿右衛門窯跡・1670～80年 楠木谷窯と南川原柿右衛門窯は共に柿右衛門ゆかりの窯であるので、一緒に記載する。 上記左は、楠木谷2号窯跡で出土しているもので、右は柿右衛門窯跡で出土しているものである。それぞれ外面・内面を示す。 左は底径8.2cmで、口縁部は遺存していないが、口径は15cm前後程度と推定される。右は口径9.1cmで、やはり口径は同程度になるものと推定される。高台内の器厚は前者が0.3cm、後者が0.5cmで、ともに高台内には小さなハリ支え痕が1箇所残っているが、大きさも同程度で小さい。釉調は、写真では判別も難しいが、前者がやや白味が強く、後者は黄味ないしは青味が多少ある。	 （内面）  （外面） 楠木谷1号窯跡で出土している、いわゆる藍九谷様式の中皿（左）と初期伊万里様式の小皿（右）である。 左の中皿は、型打ち成形されており、器壁が薄く、高台径も大きい。鮮やかな呉須で、内面に色紙を配して、中に菊文を描いている。外面には胴部に蔓草を廻らし、高台内に一重角枠内に「福」字を染付している。 右の小皿はロクロ成形のままで、器壁は厚く、高台径は小さい。呉須はくすんだ色調で、見込みに柘榴文、周囲に捻花状の文様を配すが、外面は無文である。 一般的に伝世品などを元にした形式学的な考え方では、まず間違いなく右の小皿が古く、左の中皿が新しいことになる。ところが、両皿の出土層位はまったく同じであり、ほぼ同じ頃に生産された製品であることが確認できる。 直接中国などから古九谷様式の生産技術を導入した可能性の高い窯の場合は、こうしたまったく異なったスタイルの製品が併焼されるのが一般的である。同様な傾向を有する窯としては、ほかに山辺田3号窯跡に例が認められる。しかし、間接的に技術を導入した窯の場合には、こうした明確な作り分けは行われず、両様式の中間的な製品が主体となる場合が多い。 柿右衛門様式と古九谷様式についても同様のことが言える。柿右衛門様式の代表的特徴とされる「濁手」の定義は、「焼成では、素焼きを行い、本焼きでは一々サヤに入れて窯詰めし、降灰の熔着や、歪み窯割れなどのない素地作りを目指した、薄い釉薬の掛かった純白の地肌で、精巧な成形の素地」とするのが一般的である。ところが、左の素地で揚げた楠木谷窯跡出土小皿陶片について考えると、質的にはほぼすべての要件を満たしているが、年代的には柿右衛門様式が成立した1670年頃よりも遡るため、この素地は「濁手」とは言えず、これに上絵付けがなされれば古九谷様式の範疇となる。
	外山	南川原	柿右衛門	初代柿右衛門は最初年木山の楠木谷窯で赤絵を創始したが、その後南川原に移って柿右衛門様式を完成した。 17世紀後半の最高水準の製品を生産した窯場。下南川原山の窯場としては、一時期南川原窯ノ辻窯と併存。相対的に早い段階の製品と推定されるものには、年木山の楠木谷窯との類似性が認められる。製品は中・小皿を中心としており、いわゆる柿右衛門様式に分類されている製品の典型的なものの多くはこの窯場の製品である	染付け　柿右衛門	 色絵柘榴文輪花皿 （出光美術館蔵） 江戸時代（1650年代） 山辺田窯に続いて色絵磁器を焼き始めた楠木谷窯の製品。山辺田は大皿中心、楠木谷は中小の皿といった器種の違いとともに、楠木谷では素焼を行うなど技術の差もあり以後の有田の窯は楠木谷系の技術を受け継いでゆく。高台内に「承應弐歳」（1653年）の銘がある。 （解説出典：青柳慶介、荒川正明『古伊万里　磁器のパラダイス』）	 楠木谷窯出土、捻縁　緑紅つる草文中皿 （有田町歴史民族資料館蔵） 楠木谷窯は藍九谷、色絵古九谷の最盛期作品類を製作している。 染付及び色絵素地で薄作り、高台径が大きい捻縁　緑紅の上手皿類が見られる。写真は藍九谷最上手といえる捻縁　緑紅中皿陶片である。表には美しいつる草文が描かれ、裏面にはつなぎ唐草文が廻らされている。 制作年代は承応年間頃を中心において考えられよう。

有田

外山

外尾山　丸尾

丸尾窯は稼動期間わずか15年ほどという短命の窯ですが、その期間はまさに初期伊万里から藍九谷への過渡期に当たっており、両様式の特徴を併せ持つ一種独特の雰囲気が大きな魅力と言える。
丸尾窯は、山辺田窯の位置する黒牟田地区の隣、丸尾地区に位置する。色絵素地も比較的多く生産されたことが知られているが、現在では道路等の敷設などによって、窯跡はほぼ壊滅状態である。山辺田窯と異なりおそ窯体は1基で、1650年代前後に短期間設けられた窯場と推定される。らく出土している色絵素地には、染付の入るものと白磁の両方がある。まれに高台内に二重の可能性のある染付圏線を配したものもあるが、原則的には一重以下である。また、山辺田窯跡のように外面胴部に染付文様を配したものは、可能性のあるものは指摘できるものの明確な例はこれまでのところ認められない。地肌は独特な乳白色を呈するものが多く、山辺田窯跡と比べ、概して鉄分の発色が少ないのも一つの特徴である。山辺田窯と並んで色絵素地と推定される大皿の割合が高い。

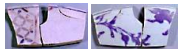
1640年代後半～1660年代

黒牟田　山辺田　山辺田遺跡

有田の窯業発祥に関係する窯場の一つで、他の窯場に比べ 大皿の割合が高い。染付は粗質なものが多いが、中にいくらか極めて精緻なものが見られ、異なる技術を持った陶工集団が 混在していたと思われる。
1～4号窯・7号窯などで色絵素地が出土しており、特に3号窯は素地の割合がかなり高い。
山辺田窯跡については、近接して工房跡と推定される山辺田遺跡が発見され、1640～50年代の色絵や色絵素地が多く出土している。山辺田では絵付けも行なわれていたことがわかった。山辺田遺跡で出土した色絵や素地には、以前出土したものも含めて、相当にかたよりがある。山辺田窯跡では、これまでに公表されているだけでも、1号、2号、3号、4号、7号窯跡で色絵素地の出土が確認されている。この中で山辺田遺跡で出土するものは、7号窯跡の出土品と共通性が高く、中には同じものもある。これは、山辺田窯跡に関わった業者の一軒であったと考えれば不自然ではなかろう。

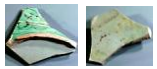
1600年代～1650年代
唐津陶器　初期伊万里　古九谷様式(1640～50年代)

山辺田7号窯（左）と
山辺田遺跡（右）の
色絵素地


色絵幾何文手大皿

出土素地に該当する伝世品
梅沢記念館蔵
（古九谷様式）

出土色絵陶片と類似する
伝世品　MOA美術館蔵
（古九谷様式）



出土色絵陶片と類似する伝
世品
ジャカルタ国立博物館蔵

染付の入らない種類の素地は、いわゆる五彩手と青手の両方が出土している。
この中で青手は比較的多く出土しているが、種類はみなほとんど同じである。すなわち、外面胴部に小さく丸い唐草をびっしりと配し、体部全体を緑絵具で塗り潰して、高台内は共通して白地を残している。内面は緑と紫絵具を使用して草花を描き、すき間を花などの地文で埋めて黄色で塗り潰している。
こうした特徴を持つ製品は、東南アジアに伝世しているものが二例紹介されている。これまでのところ国内で出土・伝世している例は知らないが、比較的類似した特徴を持つ中皿に「承応貳歳」(1653)の高台銘を配したものがある。

（内面）

色絵幾何学文台鉢
（山辺田遺跡出土）

（外面）

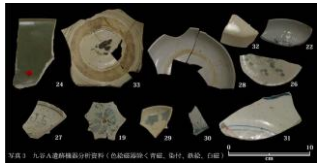
この陶片は素地などの特徴から見て、山辺田窯の製品と考えてまちがいない。製品の分類としては、色絵古九谷様式の中でも一般的に「幾何文手」と称されているものであり、主として内面に亀甲状の幾何学文様を描くこと、外面に青上絵具を用いた唐草文を巡らすことなどが特徴である。こうした幾何文手の台鉢は伝世品もいくつか知られているが、内外面の文様パターンや素地などはすべて今回の出土資料と類似している。よって、山辺田窯の中でも、おそらく同じ窯で生産された製品である可能性も高く、これまでの出土資料の中では、7号窯製品として紹介されているものと最も共通性が高い。生産年代としては、これまでの研究成果から1650年前後と推定される。

加賀

九谷遺跡

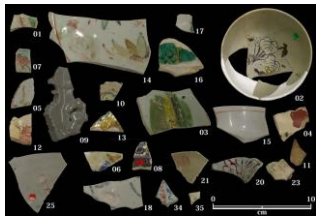
戦国時代、江戸前期、江戸後期の3つの時代の遺跡が確認されている。
江戸前期の遺跡は盛土と石垣で造成された屋敷跡で、九谷焼の生産を管理した施設と推定されている。
色絵窯跡と思われる焼土の遺構も発見されており、この場所で上絵付けがされていたことを裏付けている。

色絵窯跡と思われる焼土遺構



九谷A遺跡出土色絵以外の磁器片
出典：金沢大学考古学紀要「九谷遺跡出土品から探る九谷色絵」

石川県埋蔵文化財センターが平成16年までの十年間に九谷A遺跡で出土し、分析に供された試料および磁器片は、色絵、染付、白磁、青磁など35点である。


九谷A遺跡出土色絵磁器片
出典：金沢大学考古学紀要「九谷遺跡出土品から探る九谷色絵」

九谷一号窯

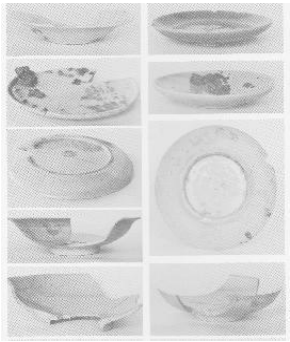
全長34mを超える大規模な連房式登窯で、幅2.6mの十二の焼成室が20度の傾斜をもって連らなっている。窯の左側が物原（陶片の廃棄場所）で、その上部の平坦な所から大量の優品が出土している。
直径50cmを超える白磁大鉢や草花、山水図を描いた皿、碗類、上絵付のある破片などがあり、特に「明暦弐歳（1656）九谷八月六日」と記銘のあるものが出土しており、窯創始の年代を知る重要な資料となっている。窯の終末年代は1670年前後30年である。

「明暦弐歳（1656）九谷八月六日」銘色見陶片
大皿の裏面中央に大きく「九谷」、右側に小さく「明暦弐歳」、左側に「八月六」とある。出典「九谷古窯　第二次調査概報」

九谷窯跡の基本構造は肥前窯業技術で構成されている。窯構造、窯道具、ロクロ技術、焼成技術、製品形態のいずれも、17世紀中頃の有田の技術と形態であり、山辺田窯付近にあった丸尾窯等の陶工がリストラ後に九谷に移住したのではないかと想像される。その後に海外輸出品製作で有田に現れる技術革新の成果は九谷にほとんど見られず、九谷に有田から新たに追加陶工が招かれた痕跡はない。九谷は有田の技術を基本とするが、染付文様は有田と異なる。絵描き技術者の由来は京都や加賀工芸に求めることも可能であるが、この点については不明瞭な点が多い。

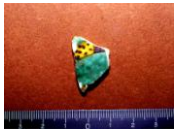
1641～47年頃
九谷陶石発見

1655～1670年頃


九谷一号窯出土　皿鉢陶磁片
出典「九谷古窯　第一次調査概報」

加賀産古九谷青手松竹梅文平鉢
（石川県立美術館蔵）

この平鉢は、「半磁胎の素地で、荒い貫入がはいり、高台が比較的小さく、口紅や染付、目跡がないこと、しかも器形が九谷古窯発掘の陶磁片と酷似していることなどにより、九谷古窯で生産した素地を使用し、絵付をしたものと考えることができる。」と解説されている。


九谷一号窯斜面下出土
青手古九谷陶片